

## ■ 書 評



### 精神疾患の脳科学講義

功刀 浩 著  
 金剛出版  
 2012年7月 208頁  
 本体価格 3,000円+税

本書は、「心理臨床家のための脳科学講義」として「臨床心理学」に掲載されたものに加筆修正したものである。加筆修正によって、臨床心理士のみならず広く精神科医、神経科学者、さらには家族や患者さんにも読みやすい内容となった。著者自身も指摘しているように、対象者を広く設定したために、「統合失調症は、ドーパミンの過剰」「うつ病はセロトニンの不足」といった単純化された説明に陥りがちな傾向を認めている。それにもかかわらず、本書が現在の脳科学の限界に真摯に向かい合っており、現時点での科学的根拠に基づいた精神疾患の理解を求めた意欲的な書であることがよく伝わってくる。非常にコンパクトな一冊であるが、そこに書かれている内容は現時点での「精神疾患」と「脳科学」について問題をわかりやく凝縮したものとなっている。

著者の言葉で強く印象に残ったのは、現在の脳科学の単純化したモデルで精神科疾患を理解することは「幻想に過ぎない。『理想の恋人』を求める光源氏かドン・ファンのようなものではないかと？」ときわめて深い洞察を示している点である。一方で、本書の中で脳科学を通じて精神疾患を理解しようとする強い意志も感じられ、バランスのよい良書となっている。そのことはまた、本書の「精神疾患の脳科学講義」という書名にも反映されている。

本書は、12章からなり、前半は統合失調症を中心に「統合失調症は認知症か?」「統合失調症は広汎性発達障害である」「統合失調症はどこからくるのか」「統合失調症の発達過程」「妄想をつくりだすドーパミン」である。前半の章では、DSM-体系を超えた統合失調症

の本質を探りながら、障害の基盤にある脳科学の神経回路を探求しようとする著者の意図がうかがえる。一方では、統合失調症の社会的な問題にも目配りをしている。統合失調症のもつ多面性について脳科学を論じながら、社会的な問題について言及することを忘れないことが本書の特徴である。

中盤は、うつ病を中心に「うつ病＝“慢性”ストレス性精神疾患」「うつ病におけるモノアミンと神経栄養因子」に言及し、うつ病について包括的に論じている。単に「うつ病はセロトニンの不足」として述べるのではなく、うつ病の背景になるモデルについて多様な方向性で言及している。現時点におけるうつ病の発症モデルの限界について洞察に満ちた言及をしており、うつ病の発症モデル、薬物の作用機序について単純化して理解しがちな臨床家にとっても必読の章である。

後半は「ドーパミンの威力と魔力」「慢性疲労症候群、線維筋痛症、非定型うつ病」「ストレスホルモンと恐怖記憶」「精神栄養学と生活指導」と最近の話題を取り上げている。ともすれば偏りがちな理解に陥りやすい問題をきわめて中立的に論じている。各章タイトルは一読すると挑戦的かつ奇をてらっているような印象をもつが、実は、その内容は質実にエビデンスを積み重ねたものである。しかも、各章が相互に緻密に計算されているように連携しあい、読み終わった後には著者の計算されたストーリーに驚かされることになる。各章に最後につけられている小括はその章の内容を概説するとともに次章への導入としての役割をしており、一見すると連続性のないタイトルの章の間の連続性を見事につなぐ役割を果たしている。

本書は、最先端のエビデンスの議論をしながら、一般の読者にも共感できるような内容に仕上げられている。本書からのメッセージとして、脳科学の限界と同時に脳科学への期待を多くの読者に感じ取って欲しいということが伝わってくる。精神科医にかかわらず精神科医療にかかわる多くの人に読んでほしい。精神科医療関係者が、本書で示されたような科学の知見を基に共通言語で議論することが、精神科医療の向上につながると考えている。

(齊藤卓弥)